

2021年 展示・館員おすすめの本



「へいわってすてきだね」

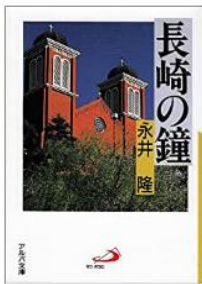


終戦から長い年月が経ち、戦争を体験した人も少なくなっています。この平和を、未来や子どもたちへ受け継いでいくのは私たちの役目です。失われた生活や懸命に生きた日が一人一人にあったことを思い、それぞれの生命の記録を読んでみませんか。
(原真由美)



堀川恵子『原爆供養塔』文藝春秋 2015

広島市の平和記念公園の片隅に「原爆供養塔」というお椀を伏せたような塚があり、地下室には今も7万人の身元不明の遺骨が眠っています。あの日を生き延びた佐伯敏子さんは、自らの使命として毎日供養塔を訪れ、遺骨を守り、遺族の元へ届ける活動を行ってきました。「これからどうするか、自分の頭で考えんといけんよね」という言葉を私たちに遺して2017年に亡くなりました。



永井隆『長崎の鐘』サンパウロ 1995

永井隆(医学博士)は原爆で妻を亡くし自らも重傷を負いながら、「己のごとく人を愛せ」との精神を貫き、救いを求める人々のために不眠不休で救護にあたりました。その後二人の幼子を遺して43歳の生涯を閉じました。「爆撃直後の情景」「救護」には永井博士が目にした地獄のような惨状が描かれていますが、目をそらさずに向き合ってください。再建されたこの平和を私たちは大切に思わなければなりません。



安里有生著・長谷川義史絵『へいわってすてきだね』ブロンズ新社 2014

沖縄県与那国町の安里有生君は平和について詩をつくり、祈念式典で朗読しました。与那国島には美しく青い海があり、風が吹く丘には馬がいて、お友達と仲良く家族が元気。「みんなのころから、へいわがうまれ」「やさしいころからにじになる」と素直な心で表現された詩が絵本になりました。笑顔と平和が永遠に続くように「ぼくのできることからがんばるよ」と私たち大人に真っ直ぐに伝えてくれます。



〈世界平和を祈る〉

- パトリック・モディアノ『1941年。パリの尋ね人』作品社 1998
- フィリップ・クローデル『リンさんの小さな子』みすず書房 2005
- スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』岩波書店 2016

〈子どもたちへ手渡したい一冊〉

- 中沢啓治『はだしのゲン私の遺書』朝日学生新聞社 2012
- つちやゆきお文・『かわいそうなぞう』金の星社 1970
- 半藤一利『焼けあとのちかい』大月書店 2019

